天文學

第百三十八號　（第十二卷）　昭和七年十月

# 天文學と社會狀勢

（卷頭言）

年頭にも言つた通り，今1932年は珍らしくも十個の週期彗星が近日點に歸來して來る年に當つてゐるから，（此等のものが皆再發見されることはあり得ないにしても，）此のうちの多數は熱心家によつて發見され，學界を頗る賑ははせるだろうと思つてゐた．所が，今日までのところ，此の豫期の彗星中，再發見されたもの未だ僅々三個に過ぎないのに對し，全然新しい彗星が既に七個にも及び，甚だ以つて愉快な話題を多く與へられてゐる．それにつけても，こうした合計十個の彗星の中で，發見の國別を言へば，米國が七，南阿が一，西班牙が一，南米が一，といふ有樣であつて，（近年歐州の彗星發見が振はないのは不思議であるが，）近代の世界に於ける新進の文化國である我が日本に於いて此の種の成功が今年一つも無いのは慨はしいことである．聞く所によれば，東京や京都の天文臺には，それぞれ彗星搜索用專門の新器械を有つてゐるのであるし，又，國內には天文ファンの數が驚くまでに增しつゝあつて，大小望遠鏡の數も夥しいものである．しかるに，いつまでも望遠鏡を玩弄物とのみ見なして，一般ファンの中から健實な觀測者が現はれず，今日の時代と社會とに相應しからざる消極的狀勢に止まるのを見ると，世の中の所謂天文熱には，何等かの錯誤があるのではないかとさへ思はれる．之れについては，吾々天文同好者のみならず，天文學の專攻學者も，又，理學教育の當局者も，更に文化行政の識者たちも一考再考しなければならない點が少なくないのではないかと思はれる．